

埼玉県教育委員会教育長賞

青山学院大学系属浦和ルーテル学院中学校 二年 柳下 翔

ふるさと納税

ある時、父と母の会話に「ふるさと納税」という言葉が出てきた。僕はその言葉に優しさを感じて興味が湧いた。「ふるさと」だなんてどんな税金なのだろう。しかも、父と母が積極的に納めようとしている様子に驚いた。早速、自分なりに調べてみようと思った。

調べ始めてすぐに「ふるさと」という言葉に込められた意味に感動した。故郷を想ったり、訪れたことのある所などに力になりたいという「優しさ」が込められているのだ。

ふるさと納税の誕生の経緯はわかりやすい。多くの人が地方で生まれ、その自治体から医療や教育など様々な住民サービスを受けて育ち、やがて進学や就職を機に生活の場を都会に移し、そこで納税する。その結果、都会の自治体は税金を得るが、生まれ育った故郷の自治体には税金が入らない。そこで、今は都会に住んでいても、自分を育ててくれたふるさとに自分の意思でいくらかでも納税できる制度があっても良いのではないかという問題提起から始まり、沢山の議論と検討を重ね生まれたのが「ふるさと納税」なのである。恩返しという優しさがある納税だと感じる。

また、家族の出身地や離れて暮らす家族が居る所、思い出深い旅行先などが過疎化や高齢化が進んでいると知りふるさと納税をする。応援したいという優しさがある納税だと思う。

「ふるさと納税」には「納税」という言葉がついているが、実際には都道府県や市町村への「寄付」をする制度だとわかってきた。ふるさと納税で自治体に寄付をすると、寄付した金額の自己負担額二千元を除いた金額が税金の控除の対象となる。つまり、ふるさと納税を通して寄付を行うことで、実質的にその自治体に納税していることになる。これなら、二千元の負担があっても通常通りに所得税や住民税を納めるより、「恩返し」や「応援」の気持ちを込めて「ふるさと納税」を行いたいと思うのは、当然のことだと思った。

地方の自治体の中には、過疎化や高齢化が進み税金が枯渇し、十分な行政サービスが成り立たない心配がある。都会には無い美しい自然や動物を守るにも予算が必要だ。今後のためにも観光業や産業を活性化するのも急務だ。自治体に税金が潤沢にあれば色々な活動を良い方向に実行できるだろう。ふるさと納税は納める側が使い道を選べるので自分の意思を反映することができる。このことも納税意欲につながる素晴らしい仕組みだと思う。

驚いたのは「恩返し」と「応援」に対して自治体から「お礼」があることだ。その土地の名産品に感謝の気持ちが込められ送られてくる。受け取る側は名産品を選ぶ楽しみがあり、送る側は産業を全国の人に知ってもらえる貴重な機会となり、どちらにとっても笑顔が生まれるやりとりになること間違いなしだ。

父と母の会話に参加した。ふるさと納税を行うことに決まった。ふるさと納税は「思いやりのキャッチボールだね。」と笑顔になった。